

遺跡の概要 高木家は関ヶ原の合戦の功により、慶長 6（1601）年に時・多良を拝領しこの地に入部した。高木家の石高は西高木家 2300 石・東高木家 1000 石・北高木家 1000 石であったが、交代寄合として大名の格式を許され、幕末までこの地を治めていた。また「水奉行」として木曾三川の治水にもあたり、宝暦治水にも深く関わった。

旗本西高木家陣屋跡は、嘉永 5（1852）年の棟札をもつ長屋門や天保 3（1832）年の火災後の再建建物の一部を残す主屋がある。埋門をはじめとした城郭を思わせる石垣群や西高木家歴代の墓所も残り、平成 8 年に岐阜県史跡に指定されている。また、名古屋大学所蔵品を中心とした高木家文書は治水関連資料が注目されてきたが、その総数は 10 万点以上と推定され、現在もその整理・調査が続けられている。

調 査 地 大垣市上石津町宮

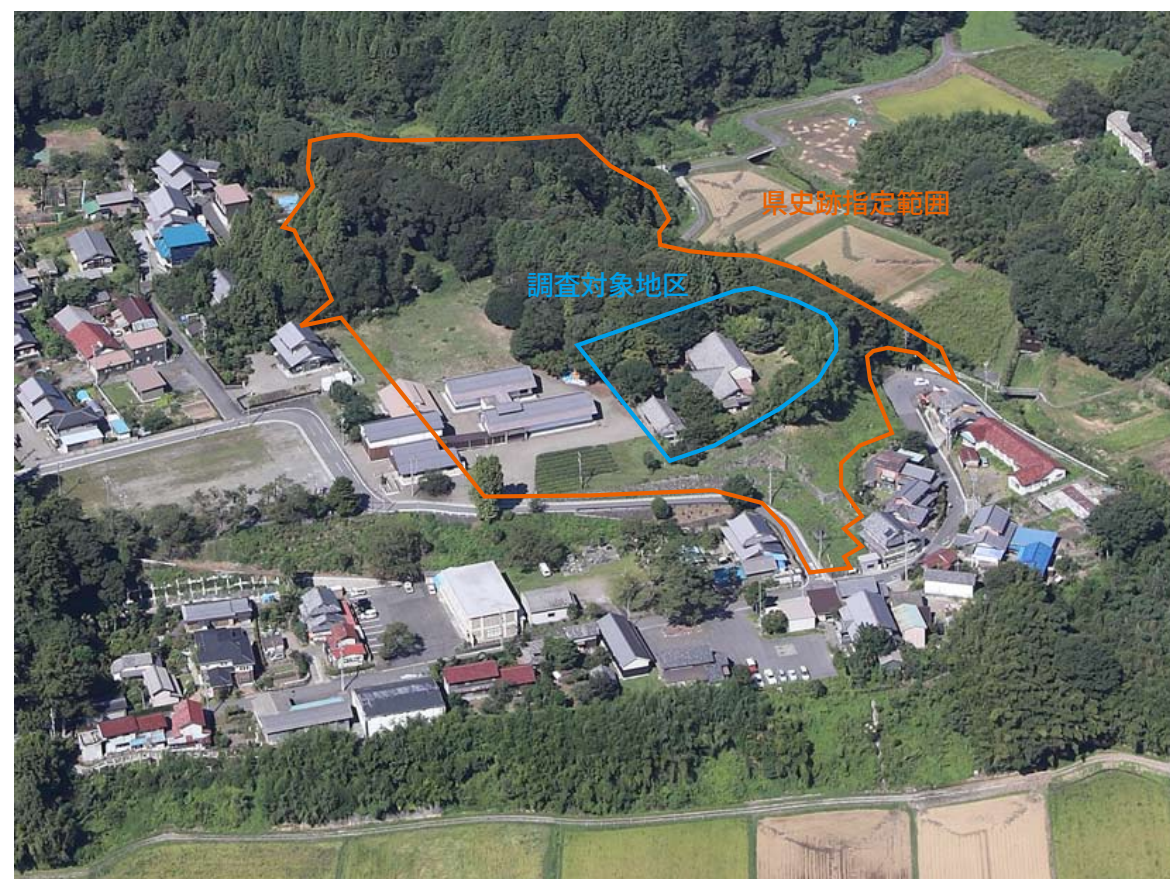
調 査 期 間 平成 23 年 9 月 26 日～同年 11 月末（予定）

調 査 面 積 約 35 m²

調査の成果 今回の調査は、陣屋跡地での地下遺構の残存状況確認を目的として行いました。また、あわせて現在の地表面に残存・露出する近現代までの建物の痕跡等の調査も行いました。

その結果、①近現代（明治～昭和）の門跡・敷石・排水溝などのほか、②近世（江戸時代）の排水に関連する暗渠施設や建物に関連する石列を確認しました。更に、③天保 3 年の火災に関連すると思われる焼土や炭化物を含む層も見つかりました。また、方向の異なる石列と暗渠が重なって確認され（A トレンチ）、それぞれ文政年間（1818-1829）と天保～安政年間（1830-1859）の屋敷絵図と建物方向が一致し、④これまで絵図から想定されてきた建物の変遷を現地に残る遺構から裏付けることができました。

このように今回の調査では、現在の陣屋跡の地下には、火災の痕跡や各時期の建物の変遷を示す近世の陣屋遺構が良好に残存していることがわかってきました。



東上空から見た旗本西高木家陣屋跡



被熱した石垣石材



D トレンチの焼土層



B トレンチの暗渠（手前）と庭飛び石（奥）



A トレンチの石列（奥）と暗渠（手前）



嘉永五（一八五二）年の棟札をもつ長屋門

